期間: 平成 29 年 11 月 16 日～12 月 13 日
場所: 愛知県立大学
長久手キャンパス図書館１階ロビー
主催: 愛知県立大学文字文化財研究所事業 稀書の会、
愛知県立大学長久手キャンパス図書館
協力: 岡崎市立中央図書館

**＜企画展示＞**

# 「旅する俳人たち」

## 【芭蕉とその弟子たち】

本学長久手キャンパス図書館は、一括したコレクションとして全国的にも稀な規模の、多くの貴重な俳諧の書を蔵しています。貴重書展示では、これまでも、この俳諧の書のコレクションを、さまざまな角度で切り取り、紹介してきていますが、今年度は、俳聖芭蕉を出発点として、旅と俳人をテーマとしてとらえていきます。

さて、旅する詩人、芭蕉の紀行文には、尾張と三河での弟子たちとの交流を記している『笈の小文』があります。鳴海の下里知足、保美に蟄居中の杜国と、多くの弟子が芭蕉を出迎え、競って歓待し、共に句を作り俳諧の実践をなしました。『曠野集』の新境地に見られるように、旅の先々で、芭蕉は弟子たちに句作の理論を伝え、強く影響を及ぼしており、彼の旅こそは新しい詩歌の生まれる場なのでした。

芭蕉の弟子たちは、それぞれに集を編纂し、芭蕉の句風(蕉風)を広めていきます。そうした作品の一つとして、今回、長崎の俳人たちの句集『渡鳥集』を展示しています。向井去来の助力を得て彼と彼の甥の卯七が編纂した集で、去来の「入長崎記」と題した短い文章もおさめます。

『渡鳥集』は、展示キャプションにあるように、本年度、俳人野航の所持していた版本(夜巻)を三宅先生が購入され、図書館にご寄贈いただいたことで、これまで図書館が所蔵していた昼巻に夜巻が加わり、揃いの完本となりました。江戸時代に一人の俳人が愛蔵した書がいつか手放され、巻も分かれながらも、長い年月を経た後にめでたく本学に揃い、永く所蔵されることになりました。本学長久手図書館の俳諧貴重書群は、希少な作品を加えて、学術的な価値をまた高めたといえるでしょう。

『渡鳥集』の編者ともなっている去来は、言わずと知れた芭蕉の高弟、芭蕉から「西の俳諧奉行」と言われ、ひときわ信頼が厚かった存在です。長崎生まれの彼は、嵯峨野に草庵・落柿舎を持ち、晩年には弟子の卯七を

助け『渡鳥集』を編み、蕉門俳論書を代表する俳論書『去来抄』を著しました。もう一人の弟子、内藤丈草も、犬山の人で、禅を修めており、侘びの精神を芭蕉から最もよくうけついだ俳人と言われました。去来は「句においてその閑(しず)かなること丈草に及ばず」(旅寝論)と評しています。丈草は大津の義仲寺にある無名庵を守り、芭蕉の死に際しては、長く喪に服すほど、忠実な弟子でした。彼らの句集は、蝶夢によって編まれ、後代の俳人たちからの顕彰のあかしとされたのでした。

芭蕉亡き後、芭蕉を慕う人々は、供養のために追善句集を出版したり、芭蕉塚を建立したりしました。『後の旅集』からは、芭蕉の死の直後、各地で弟子たちが追善の句を詠む様がうかがえます。生前の旅に加え、死途の旅をも思う書名からも、旅する俳人、芭蕉の姿がはっきりと弟子たちの脳裏に刻まれていたこともわかるのです。

## 【芭蕉信仰の広がり～芭蕉塚と芭蕉伝～】

芭蕉は不思議な俳人です。彼の死後五十回忌、百回忌、百五十回忌と、時代が下っても、芭蕉を崇拝し続ける機運は、日本各地でやむことがありませんでした。そうした風潮は、むしろ一方で芭蕉の神格化をもおしすすめるほどで、百回忌には、とうとう芭蕉は神号をもらって神となりました。神・芭蕉であるがゆえに、芭蕉は日本全国への俳諧の普及にさらにまた大きく貢献し続けたのでした。

芭蕉は、彼の愛した滋賀県の義仲寺に埋葬されますが、死後すぐから、各地の俳人たちがそれぞれに芭蕉を供養する動きがおこり、全国にどんどん芭蕉塚が出来ていきます。芭蕉塚は、芭蕉供養のための芭蕉墓碑であり、多くの場合建立の地もしくは建立した弟子などにゆかりの芭蕉の句が刻まれています。義仲寺は、芭蕉供養をする俳人たちから、芭蕉塚建立の情報をとりまとめ、『諸国翁塚記』を刊行しましたが、この書は、芭蕉塚の増加にあわせ、増補改定を続け、大変なロングセラーとなりました。現存する芭蕉句碑は、芭蕉信仰の歴史を示すものであると同時に、いわば、俳人の全国ネットワークの拠点を示すものともいえるのです。

芭蕉顕彰に力を尽くした著名な俳人として、蝶夢がいます。彼は、芭蕉の著作をつなぎあわせて文章とすることで、芭蕉の初めての伝記『芭蕉翁絵詞伝』を刊行しました。江戸から明治初期までずっと、この伝記は大変よく読まれ、旅姿の芭蕉のイメージはこの書の挿絵からも日本中にひろがり定着していったのです。

## 【芭蕉へのあこがれと旅】

芭蕉を憶う俳人たちは、いつの時代も芭蕉を範とし、きそって『奥の細道』の旅に出ました。和歌山の俳人香風も、天明三年に、和歌山から京都、東海道を通り江戸から東北へと、大旅行を試みています。帰路は浅間山の大噴火見物をし、中山道から伊勢神宮へ、そして京に戻りました。香風は、長旅の行き帰りに京の蝶夢を訪ね、歓待してもらっていますが、蝶夢自身も、東北はもちろんのこと、実によく旅をし、諸国の弟子の獲得につとめました。彼の紀行文からは今回『遠江の記』を展示しています。『更級日記』、『海道記』の一節を引用し、眼前の光景をじっくりと味わうさまからは、俳人にとっての旅の重要性が伝わってきます。まさに「東海道の一筋も知らぬ人、風雅におぼつかなし」(去来抄)という感覚なのでした。

## 【俳人の学習～鶴田卓池の場合～】

最後に、芭蕉を学んだ後代の俳人たちの中から、江戸時代後期、俳諧の実力者として「天保の四老人」の一人と称された三河国岡崎の俳人、鶴田卓池の日常学習を見てみましょう。

卓池は、多くの俳諧関係書を写して、句作の学習にいそしみました。例えば、『増山井』を写し、俳諧の季の詞を学んだり、芭蕉七部集の中でも『炭俵集』(卓池写本題名)を写し、連句の移りを頭に入れたりしています。卓池とその門人にとっては『炭俵』はとりわけ重要な書で、卓池と刈谷の俳人中島秋挙が花園山にこもり風雅な生活を送った際の記『弥生日記』にも、彼らが折にふれ範としたことが記されています。西行の歌を思い、芭蕉を追慕してそのかるみの境地を思うのが、卓池の志向する俳諧の様なのでした。

卓池はまた、非常に多くの弟子を集めました。卓池自作の弟子たちの住所録である『諸国人名』には、国名ごとに今でいうインデックスラベルが貼られ、活用の様がうかがえます。彼はまた、俳諧のみならず、絵もよくし、画帖も残しており、掛け軸として伝わる俳画も多いようです。多才な人でしたが、今回は、自撰自筆句集として、『鶴田卓池翁唫巻』を展示しています。卓池の句集には、死後に足助在住の門人板倉塞馬が選んだ『青々処句集』もありますが、『鶴田卓池翁唫巻』からは、作者本人が、自分のお気に入りの句をどのように選んだのかがわかるので、そこは自撰ならではの良さです。俳諧や諸芸の鍛錬を通し、俳人がどのように作品を作り出していったかを考えていくよすがとなるでしょう。

## 【稀書の会実地踏査】

今年度の稀書の会では、九月十八日に、実地踏査として赤坂から御油、国府の旧東海道の芭蕉塚(句碑)を訪ね、また岡崎市で、卓池ゆかりの地、真福寺を訪れ、市立中央図書館にて、鶴田卓池文庫の貴重書をお見せいただきました。岡崎市立中央図書館のご好意により、学生・院生ら共々多くの貴重な資料に触れることができ、さらに当日見せていただきました貴重書のうち、興味深い書物を今回の展示のためにお借りすることもできました。岡崎市立中央図書館と、また卓池関係貴重書に関してご教示を多くいただきました小林清司氏(元岡崎市立中央図書館勤務)に、心から感謝いたします。

※実地踏査に参加した学生による報告を最終ページに掲載しています。

※展示キャプションは、『渡鳥集』を三宅宏幸先生が、それ以外の貴重書に関しては、伊藤伸江が担当しました。

(日本文化学部国語国文学科　伊藤伸江)

**【参考文献(主なもの)】**

田中道雄・田坂英俊・中森康之編『蝶夢全集』(和泉書院・2013)
谷地快一「芭蕉信仰のかたち―『諸国翁墳記』をめぐって―」(「東洋学研究(別冊)」・2007)
『去来先生全集』(1982・落柿舎保存会)
古典俳文学大系『蕉門名家句集一』『蕉門俳諧集二』『貞門俳諧集二』(集英社・1971)
『蕉門俳書集四』(勉誠社・1983)
大磯義雄『青々卓池と三河俳壇』(名著出版・1989)
大磯義雄「『三州青々所卓池翁唫巻』–解説と翻刻–」(「岡崎市史研究」第 19 号・1998)
佐藤勝明編『21 世紀日本文学ガイドブック 5　松尾芭蕉』(ひつじ書房・2011)

## ＜展示資料一覧＞

### （１）『笈（おい）の小文（こぶみ）』

芭蕉著　乙州編
宝永 6（1709）年刊　江戸時代
京・井筒屋庄兵衛・宇兵衛板　半紙本　一冊

芭蕉が貞享 4（1687）年冬、江戸を出立し、三河・尾張・伊勢・伊賀・大和・紀伊を経て、須磨・明石を遊覧した際の紀行文。芭蕉は尾張では鳴海の下郷知足、三河では保美の杜国ら弟子と旧交をあたため、郷里伊賀にたちよっている。翌年、美濃国から信濃国の姨捨山に名月を見に出かけた小旅行、いわゆる『更科紀行』の旅もおさめる。なお、県大本は再刻本であり、また半紙本であるが、版木のサイズが桝型本に近いので、本文上部が空きやや違和感がある紙面となっている。

### （２）『曠野（あらのしゅう）集』

荷兮編　元禄 2（1689）年序　元禄 3（1690）年刊
京・井筒屋庄兵衛板　半紙本　八巻二冊・員外一冊

書名は、芭蕉の序文にある「雲雀立つあら野におふる姫百合の何につくともなき心かな」(山家集・西行)による。俳諧の新時代の様を「曠野」にたとえ、編者荷兮をその荒野の番人にたとえた。なお、県大本は後印本。
13 丁裏 2 句目「初夢や浜名の橋の今のさま」(越人)との句があるが、これは、中世までは著名であったが、芭蕉の頃は無くなってしまった旅の歌枕「浜名の橋」を詠んだもの。15 世紀末、地震による地殻変動で浜名湖が外海とつながったことにより、旅のルートも渡し場も変わり、浜名の橋も再建されなかった。

### （３）『俳諧炭俵集（はいかいすみだわらしゅう）』

野坡・孤屋・利牛編
元禄 7（1694）年素竜序
京・井筒屋庄兵衛、江戸・本屋藤助 合板　半紙本　二巻二冊

刊行されると大きな反響を呼び、芭蕉による「かるみ」の代表となった撰集。
庶民生活の観察と俗語の自由な使用が大きな特色で、後代に非常に重視

された。卓池も自ら筆写し手元におくなどしている(→卓池自筆『炭俵集』)。県大本には、元所蔵者により見返しに天保三年春所蔵の旨の書き入れがある。

### （４）『渡鳥集』（わたりどりしゅう）

卯七・去来共編
元禄 15（1702）年跋　宝永元（1704）年刊
京・井筒屋庄兵衛　半紙本　二巻二冊

二巻は昼巻と夜巻より成る。昼巻には芭蕉や蕉門の発句を配し、夜巻には長崎出身の去来が幼い時の思い出や長崎の俳人との交流を記した「入長崎記」とともに、歌仙などを収める。二巻本であるが、昼巻夜巻と共に書肆名が載り、昼夜のどちらが先であるかは原本に明確な記述がない。夜巻の巻末に「名二巻説」と題して、「卯七子『渡鳥集』を撰びて、昼夜の二巻となしぬ。是をよるひると重ねんや。将タ昼夜と並べんや。たゞ渡鳥の年々行廻り、己が初おはりを知らざるがごとく、撰者の心もかく思ふなるべし。」とあるので、四季が巡るごとく、渡り鳥が巡るごとく、どちらを先とせずとも楽しめるようにした趣向であろう。

本書の昼巻は、昭和 26 年に名古屋の古書肆藤園堂から一括購入した古俳書コレクションに含まれていた。夜巻を欠いていたが、この度東京の古書肆より夜巻を購入。昼夜の二巻が揃うこととなった。昭和 26 年に購入した昼巻にも、今年購入した夜巻にも、裏見返しの部分に「野航」の書き入れがある。野航は本書の序を記した各務支考の従兄、美濃の社中で活躍したとされる。約何十年ぶり、あるいは何百年ぶりに本書は二巻が揃った。その伝来的にも珍しい貴重書といえる。

### （５）『去来発句集』（きょらいほっくしゅう）

蝶夢編　明和 8（1771）年蝶夢序　安永 3（1774）年刊
刊記なし(『丈草発句集』より京・井筒屋庄兵衛、橘屋治兵衛 合板）半紙本　一冊

蝶夢により編まれた芭蕉の弟子去来の句集。去来（慶安 4(1651)年～宝永元(1704)年）は長崎の人。芭蕉の作風に忠実な弟子であり、蕉門俳論書を代表する俳論書『去来抄』を著した。蝶夢は、句集を残さなかった芭蕉の二人の弟子、去来と丈草を「蕉翁の風雅の骨髄」の態度であると褒め称え、その顕彰のため両人の句集を編纂した。

本集は丈草の句集と組で、去来発句集を上巻、丈草発句集を下巻とな

す。それゆえ、刊行は『丈草発句集』の刊記より安永３（1774）年と知られる。『去来発句集』に関しては、県大本は誤伝の句を入れ替えた後印本である。

### （６）『丈草発句集』（じょうそうほっくしゅう）

蝶夢編
安永３（1774）年刊
京・井筒屋庄兵衛、橘屋治兵衛　合板　半紙本　一冊

蝶夢によって編まれた芭蕉の弟子丈草の句集。去来発句集と組で、去来発句集を上巻、丈草発句集を下巻となす。県大本は後刻本。内容は芭蕉門人丈草の発句を四季別に編纂したもの。内藤丈草（寛文 2(1662)年～元禄 17(1704)年）は、犬山の人。二十代で出家し、芭蕉に入門した。『渡鳥集』に入集した句も見える。

### （７）『後の旅集』（のちたびしゅう）

如行編　元禄８（1695）刊
京・井筒屋庄兵衛板　半紙本　一巻一冊

芭蕉の弟子近藤如行が、芭蕉の死に際し、百か日の追善に大垣正覚寺に芭蕉塚(尾花塚)を築くと同時に、記念に編んだ追悼集。如行は美濃の蕉門の中心であり、芭蕉の美濃地方での旅の句や、美濃を中心とした各地の蕉門の弟子たちによる追悼の句がおさめられている。
なお、文中には 3 カ所、おそらく編者如行によるのではないかと思われる印刷後の訂正がある。一例として、22 丁表後ろから二行目の句の「石花空」のルビ「カキカラ」は、印刷時「カラ」のみついており、墨で「カキ」を書き加えている。

### （８）『諸国翁塚記』（しょこくおきなづかのき）

義仲寺編　宝暦 11（1761）序　天保 15 年（1844）刊
京・橘屋治兵衛刊　半紙本　一巻一冊

日本全国に広がる芭蕉塚の集録。芭蕉の墓のある義仲寺による編集で、塚の名称、所在地、きざまれた芭蕉の句、施主を記す。江戸時代を通じ、各地で芭蕉塚の建立はなされ続け、幕末には千基に迫ったという。それにあ

わせ、本書も芭蕉塚の掲載数を増やし増補を重ねている。県大本は宝暦 11 年（1761）の義仲寺板行のものを増補し、京都の書肆によって版を重ねた後代のものである。展示の箇所には、最初の芭蕉塚である笠覆寺の千鳥塚、国府の米林下才二の建てた陽炎塚の名が見える。

（９）『芭蕉翁絵詞伝』

蝶夢編　寛政 5（1793）年刊

京・井筒屋庄兵衛、橘屋治兵衛 合板　大本　三巻三冊

蝶夢が、芭蕉百回忌に芭蕉の生涯を読み物仕立てでまとめ、狩野正栄の絵をそえた書。芭蕉の人生を語るにあたり、芭蕉の俳文などの作品から文章・句を抜き出してまとめる手法をとる。芭蕉の初めての本格的な伝記。広く流布し、版を重ね、その挿絵により「旅に生きる詩人芭蕉」というイメージが浸透した。

県大本は、中巻の那須野の挿絵において、初印本は芭蕉、曽良共白衣であるものが、黒衣になっており、後刷本とわかる。縹色表紙には、「粟」「津」「文」「庫」の四文字と松葉を散らした文様が入り、義仲寺関係書の装丁である。

（10）『東行日記 笠やどり』

香風著　天明 3（1783）年刊

京・橘屋治兵衛板　半紙本　一冊

南紀田辺の俳人宗祇庵香風の旅日記。序文を蝶夢、題号序を蓼太と、東西の有力俳人が記す。香風は、宗祇と芭蕉にあこがれ、芭蕉の『奥の細道』の旅を自らも体験すべく、京都から東海道を下り、東北に向かっている。京都では蝶夢に挨拶し、滋賀の義仲寺により、名古屋近辺では鳴海の下郷学海をたずね、知立の無量寿寺の芭蕉塚を見ている。東三河では国府の米林下才二、吉田の古市木朶をたずねるなど、当時の有力俳人のもとをたどり、芭蕉塚を鑑賞しながら旅をした。

## （11）『遠江の記』

蝶夢著　天明６（1786）年刊
刊記なし　縦細型大本　一冊

京都岡崎の五升庵に住む蝶夢が、天明６（1786）年３月に三河と遠江を訪れた際の旅日記。鳳来寺・秋葉山へ行き、浜名湖めぐりをして、かつては海と独立していた浜名湖にかけられていた浜名の橋について、実証的に現在の様子を記す。蝶夢は遠江の弟子開拓に熱心で、遠州浜松に三度訪れている。

※本学貴重書コレクションには［登宝当安布海農伎］のタイトルで収録されています

『遠江の記』より「浜名の橋の図」

## （12）『弥生日記』

鶴田卓池・中島秋挙編
文政７（1824）年　名古屋・本屋久兵衛刊　半紙本　一冊

卓池五十七歳、秋挙五十二歳の春、三河の名所を連れ立ってめぐった後、岡崎の花園山麓に寓居し、弥生の一月あまりを花をめでながら俳諧ざんまいにすごした折の日記である。風雅な俳諧生活の記念に同年五月、名古屋の書肆本屋久兵衛から刊行した。

花園山では、蕉風を慕って、芭蕉・基角らの初懐紙「鶴の歩み」にならい、まず両吟五十韻を張行した。その後は、足助、刈谷、碧南、安城、御

油、豊橋などから多くの門人の来訪を受け吟遊。亡き師井上士朗をしのび、芭蕉七部集の一である『炭俵集』を読み、さらに滞在の終わり頃には、それを範として歌仙をまいている。

### （13）『炭俵集』（すみだわらしゅう）

岡崎市立中央図書館蔵
鶴田卓池写
文化文政年間　中本　一冊

『炭俵集』（→本学図書館所蔵『俳諧炭俵集』）から連句だけを抜粋し卓池が写した書。朱で花・月に丸印、また句の上部に季節と折を記し、難語の意味を小字にて傍記しており、一巻の句の移りを学んでいる。『炭俵』は卓池の俳諧の基本の教養書であった。『弥生日記』においても、卓池と秋挙は弟子たちと『炭俵』を紐解き、『炭俵』の作風を真似て歌仙を巻いていた。

### （14）『増山井』（ぞうやまのい）

岡崎市立中央図書館蔵
北村季吟著　寛文３（1663）年奥書　寛文７（1667）年刊
鶴田卓池写　大本三つ切本　一冊

俳諧の季の詞を四季別月順に配列収録した『増山井』を卓池自身が写し、さらに句意などをびっしりと書き込んだ学習の跡がうかがえる書。『増山井』は後の季寄の書の基準となった書として知られる。

### （15）『諸国人名』（しょこくじんめい）

岡崎市立中央図書館蔵
鶴田卓池筆
天保年間　中本　一冊

卓池自身が、書き留めて使用した諸国の俳人の名簿。知人や弟子の住所録であり、仮綴じながら私的にインデックスラベルを自作しており、手元で活用したことがわかる。表紙は赤い染紙に龍の顔と雲紋模様がある。単線枠入九行書の用箋に、山城国から順に弟子の名と住所を記す。収録人数は八百名に及び、広く諸国に分布し、卓池の人脈、活躍ぶりがわかる。地元

三河国にはもちろん多くの弟子がいるが、尾張国にも、横須賀、常滑、知多半田、成岩など知多半島一円に多くの弟子がいる。なお、卓池作成の人名帳は年代ごとに三冊残り、全て岡崎市立中央図書館に寄贈されている。

### （16）『鶴田卓池翁唫巻』（つるたたくちおうぎんかん）

岡崎市立中央図書館蔵
鶴田卓池自撰自筆
天保 6（1835）年(大磯義雄氏推定)　巻子本　一巻

鶴田卓池の自撰自筆句集。『青々処句集』が門人板倉塞馬が選んだ卓池句で構成された句集であるのにくらべ、本巻は、卓池の自撰自筆であり、その点で高い価値がある。発句を四季順に配列しているが、九月九日重陽の節句に、宮路山に登った際の句には特に長い詞書があり、卓池の特別の思いをしのばせる。
元は冊子本であったものを巻子本に仕立て直しているため、綴じ穴、折り跡が見られる。旧蔵者尚樹により、巻子本に仕立直されたと思われる。

### （17）『青々処句集』（せいせいしょくしゅう）

岡崎市立中央図書館蔵
鶴田卓池著　板倉塞馬編
嘉永 4（1851）年跋　半紙本　乾・坤二冊

卓池の句集を卓池の没後に足助俳人板倉塞馬が編纂し、刊行したもの。句集から卓池は東北から長崎まで、実に多くの名所をめぐっていることがわかる。また、徒然草第七四段の一節(身を養ひて何事をかまつ。期する処唯老と死とに有。)に想を得た句(坤巻表示箇所)や、秋挙の小垣江の曙庵を祝う思いの句などが見られる。

## 稀書の会　実地調査報告

岡崎中央図書館
鶴の草池
弥生日記
真福寺
稀書の会
稀書の会
実地踏査
赤坂駅
浄泉寺
国府観音
松並木資料館
関川神社
御油の松並木